

D 13 だんらん空間に関する研究(第2報)

(その1) だんらんに関する意識と評価

大阪教育大 岸本幸臣 神戸山手女子短大 ○中西真弓

目的 前年度報告では、だんらん空間の実態を、プランタイプと住み方実態から分析したが、本編では引きつづき居住者の意識や評価の面から考察を加えることとする。

方法 前年度と同じ

結果 (1)だんらんの評価 だんらん行為について、「揃い方」「時間」「総合」の3側面から捉えると、6割強の満足度がみられる。特に「揃い方」や「時間」の内容別の考察を加えると、過半の人々が満足度を示す条件は、家族のほぼ全員が揃っていることと、1時間以上のだんらん時間をとることが必要とみられる。(2)家族観とのかかわり 家族に関する意識を、「運命共同体」「食事の揃い方」「家族間の理解」「夫婦の一体性」「親子同居」の5項目で捉えると、前2項目は家族中心的な反応が強い。しかし、後の3項目については、家族中心的な考えと、個人中心的な考えとに分解している。この家族観の反応特性を、「家族重視型」と「個人重視型」の層に類型を試みると、5対1で前者が多くみられる。また、現実には家族が揃って夕食をとっている率は、前者に倍近くみとめられ、家族観がだんらんの形態や内容と相関していることがうかがえる。(3)住み方の類型 居住者の住み方から、「だんらん室充実実型」と「接客室充実実型」を抽出すると5対6となる。また、だんらん室充実実型の居住者の場合は、実際のだんらんにおいて、家族の揃い方と頻度の面でも積極的であるし、だんらん評価にも満足度が高い。接客室充実実型は、実際の接客に対してさえ、大きな評価差は認められない。このことから、だんらん室充実実型の居住者の方が、住生活の全般に対して、積極性や満足度が高いとみることができるといえる。